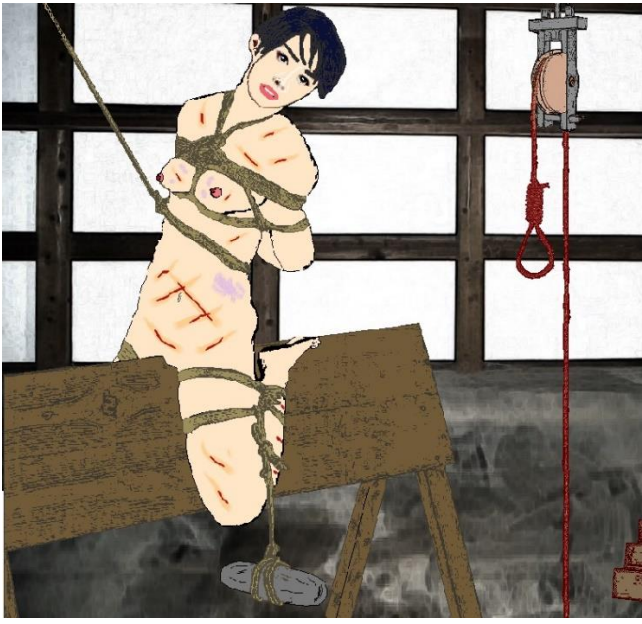
非道と淫虐の上意

陰謀の贄にされた父と
淫欲の贄にされた母子

民江編　女囚永代吟味



濠門長恭

信乃嬢に捧げる

目次

一・母子連座……四
二・全裸牢問……一七
三・牢内仕置
四・十露盤責
五・逆釣尺八
六・三角木馬
七・駿河問責

八・色責狂乱
九・揚屋目掛
十・長女晴姿
後書き

一・母子連座

御蔵番頭（ばんがしら）の小早川忠茂が行方知れずとなった二日後には、八百両を超す公金が消え失せていることが発覚した。即刻、小早川家は閉門に処され、妻の民江以下、嗣子佐太郎、長女綾乃、次女琴乃も蟄居を命じられた。

その日のうちに通い中間は消え失せ、住み込みの下女二人も巻き添えを恐れて口入屋へ逃げ帰り、屋敷には一家四人のほかは先代から仕えている年老いた用人ひとりだけとなった。もちろん、長屋住まいの二人の郎党は寄りつきもしない。

翌日には、大目付が配下の手勢を引き連れて屋敷に乗り込み、秋霜烈日の断が下された。

上意

御蔵番頭小早川忠茂儀　八百余両の公金を拐帯せしばかりか長年にわたって二千四百九十三両を着服せし不届きの段によって士籍を削り而して死罪を申し付くる物也

直ちに討手を掛けて櫓櫂の及ぶ限り追い詰め屹度討ち果たすべし

家族は之に連座して名を非人別改帳に移し以下の如く処する物也

一、民江儀

吟味の為入牢を申し付くる

一、嫡子佐太郎儀

精徳寺へ永代預かりとする

一、長女綾乃儀

処断は猶予し小早川追捕一行への同行を申し付くる

一、次女琴乃儀

奴（やっこ）として舞華楼亭主に下げ渡すものとする

因って件の如し

死一等を免除されたのだから一見寛大な処置のようであるが、武家の妻子として死罪に処されるのではなく、非人に墜とされるのでは、死罪よりもなお苛烈だった。

「それがしからも申し渡しておく」

平伏している四人の頭越しに、大目付が厳しい声を投げつけた。

「もし一人たりとて命に服さず逃亡を試みれば、一家そろって市中引き回しのうえ磔に掛けるから、左様心得おけ」

自害は許されぬにしても、せめて屋敷内でひっそりと首を落とされるのと、罪人として庶民の目に晒されたあげくに刑場で磔にされて槍で突き殺され、そのまま骸を野晒にされるのとでは、同じ死刑でも雲泥の差がある。

民江は、子供達のそんな姿を脳裡に描いて、ゾクッと身体を震わせた。

平伏している民江の後ろに下役人が立った。肩をつかんで身体を起こし、打掛を剥ぎ取った。腕を背中へねじ上げて、手首を縛る。

処罰は覚悟していたものの、まさかいきなり縛られるとは思ってもいなかった。民江は呆然と、されるがままになっている。縄が二の腕を扼して首に巻かれた。腰を二重にした縄で縛られ、前を通って首縄に絡められ、そこから左右に分けて肘を縛り、前を縦に通る縄に絡めて左右に引き絞ってから腰縄に結ばれた。身体の正面に大きな菱形の縄目が描かれて、左右から乳房を圧迫した。

佐太郎は、前も後ろも十文字に縄を掛けられている。

「やめて……縛らないで」

琴乃の、ほとんど泣き声だった。

「御上のなさることです。おとなしくしていなさい」

わたくしがシャンとしていなければ――民江は、あえて厳しい声で下の娘をたしなめた。

佐太郎は半元服も済ませ、さすがにおとなびてとまではいえぬにしても、青年めいて毅然としている。

そして綾乃は……縛られていなかった。小振袖姿で端座したまま、

さきほどまでの民江と同様、魂消えているように見受けられた。

琴乃は、民江と佐太郎の二人に比べれば、ずっと穏やかな縛り方だった。同じように腰縄も打たれたが、両手は前で折り曲げて、手首を縛った縄が首に結ばれている。

それは――もっとも惨い仕置に掛けられる少女への、最後の温情にも思えた。

綾乃が囚われる場所がどういうところか、民江は知っている。わずか●三歳（※）で操を穢され、夜毎に違う男に肌身を貪られる。今の綾乃とあまり違わない歳で小早川家に嫁ぎ、それと同じだけ時を経て、武家の妻なら当然ではあるが良人の他に男を知らない。そんな民江には、娘の生き地獄は想像を絶するものだった。

琴乃が縛られ終わると。綾乃を除く三人が立たされた。母、兄、妹の順で数珠つなぎに引っ立てられた。綾乃だけが、縄も打たれず座敷に残されている。

廊下で四人の武士とすれ違った。折り目正しい身形（みなり）は一人だけで、

あとの三人は崩れた格好だった。四人とも旅支度をしているところを見ると、綾乃を同道して良人を追う討手なのだろう。

と考えるうちにも廊下を追い立てられ、履物すら許されず門の外へ引き出された。大目付は何を考えているのか、すぐには三人を引っ立てず、竹矢来を組んだ門の前に並ばせた。

向かいの屋敷の通用門からは、中間の辰吉と下女のお島が顔を覗かせて、こちらの様子をうかがっている。通り掛かった者は目を瞠り、立ち止まって遠巻きにする者もいた。たちまちに、十人を越える人垣が築かれていく。

これが我が子との今生の別れになるやも知れぬと、民江はようやく思い至った。

いっそ、この場で雷に撃たれて死んでしまいたいと思う反面、我が子には生き永らえてほしいと痛切に願う母心。民江は二人の子供達を振り返った。

「これが生き別れになるかもしれません。武家の娘であるとか、三

百五十石の家格とかいったことは忘れて、先様にどのような仕打ちをされようとも耐えなさい。生きておればこそ、浮かぶ瀬もあるというものです」

佐太郎には、蒼褪めた顔にも母の言葉を噛み締めている様子が見て取れる。しかし琴乃は――今にも泣きだしそうだった。

励ましてやろうにも、言葉が見つからない。

さらに人垣が膨れあがって、ひと目には数え切れぬまでになったとき。

不意に。どおおおおっ……と、人垣がどよめいた。

何事と、野次馬どもの注視する先を振り返って――民江は卒倒せんばかりになった。

綾乃が、襦袢はおろか蹴出しまで剥ぎ取られて腰巻一枚にされた裸身を厳しく縛されて、伏せた顔を真っ赫にして、脇口から引き出されてきたのだった。

それにしても。身の自由を奪うというよりは、女体を意図的に辱

めるような縄目だった。上下の胸縄で乳房が押し出され、両腋に通した縄と胸の谷間を腰縄まで下ろした縄とで根元を縊られて、まるで鞠のようにされている。わずかに紫色が浮いているのは、早くも鬱血が始まっているのだろうか。

「母上……」

気づいて、綾乃がわずかに顔を上げた。恥辱に歪んだ表情の中に、激しい怒りが潜んでいた。

民江は、黒雲に覆われた闇夜に、かすかな星を透かし見る思いを抱いた。怒りは、心が生きている証でもある。

「ひどい……姉様、おかわいそう」

琴乃がワッと泣き崩れた。

「なにゆえ、このようなむごい仕打ちをなさるのです」

我を忘れて大目付に詰め寄ろうとして、民江は腰縄に引き戻された。

「それはな、こういうわけだ」

浪人風の男が、綾乃の脇に高札を突き立てた。民江からも読めた。
此娘儀　父親公金拐帯に付見せしめに引き回す物也
小早川忠茂　身の丈五尺六寸　痩身　四十歳　稍若く見える
右眼横に小粒黒子右手甲に火傷痕有り
在所を報せし者に金拾両を与える物也
あまりのことに、民江は言葉を失った。
「姉で父をおびき出そうとは――卑劣な！」
佐太郎が激高して、しかし腰縄を強く引かれて高札から遠ざけられた。
四人の中ではただ一人、羽織袴に旅装を整えた若い武士が、大目付に向き直った。
「一同打ち揃いましたからには、早速にそれぞれの場へ曳くべきと存じます」
「うむ」
高札が綾乃の背中に立てられた。柄を首縄に通してから、手首と

背中の間に根元をねじ込み、縄を足して――まともに息ができるのかと危ぶむほどに、腹が縊られる。

追捕の差配人らしい武士を差し置いて、高札を披露した男が、綾乃を前に押し出した。

「先を歩かせてやろう」

ピシリと縄で尻を打たれて、綾乃はおそらく断腸の思いであろう。表情を消して歩み始めた。

その後を、民江と琴乃が追い立てられる。佐太郎が反対の方角へ曳かれて行くのを、民江はチラッと振り返った。

寺へ預けるというのは、僧籍に入れて小早川の血を断つということだ。

我が子の代で小早川家は断絶する。それは無念極まりないことであるが、先祖代々の血脈を子々孫々に継承するという思いからではなく、我が子が落ちぶれるという母親としての痛切だった。この時代、良人の姓を名乗らぬ（※）妻には（人それぞれでもあろうが）

男ほどの家名へのこだわりは無いのだった。
ともかくも、生き永らえていれば。いずれは寺を訪って、再会する日も無いものでもあるまい。
しかし、綾乃は。今は気丈に生き恥を耐え忍んでいても、目の前で父が討たれれば、その気力も潰える。
琴乃は。幼いゆえに生き地獄にも狎れて、まさかに自害はすまいが。並みの女郎なら二十八の年季が明ければ解き放たれるが。そのまま、下女として死ぬまで留め置かれるに違いない。いや、花柳病に罹って若い命を散らすかも知れぬ。
三人の男たちが壁になった隙間から、背中まで厳しく縛されて追い立てられる娘の裸身を、見たくなくとも、これが生き別れと思うと目もはなせず。
「おまえは、こちらだ」
列から引き出されて別の方角へ向かわされるまで、千々に乱れる思いの中を彷徨っていた民江だった。

娘たちと別れて、下役人に腰縄を引かれて歩くうちに、道の両側にも二階家の窓にも人が鈴なりになっているのに気づいた。まさに晒し者だった。が、恥辱の念は湧かない。もっと数多くの野次馬の視線に裸身を晒して歩まねばならぬ綾乃へと、悲嘆は向かうのだった。

※数え歳

生まれたときを一歳として、年が改まるごとに増やしていきます。大晦日に生まれた子は生後二日で二歳になるのです。

ちなみに、綾乃は長月（旧暦九月）の生まれ、佐太郎はその一年半後、琴乃は年子で神無月（旧暦十一月）の生まれです。物語の現時点は弥生（旧暦三月）。ふたりが満何歳何か月かは、読者各位で計算してください。

琴乃は濠門長恭作品最年少のヒロインですが、民江は未発表の『ドンキー・ガール』を除けば最年長になります。

※妻の姓

戸籍制度が出来る明治以前は、妻が婚家の姓を名乗ることはありませんでした。『小早川民江』ではなく『小早川忠助の妻民江』と名乗ります。第三者が堅苦しく言及する場合は、実家が野庭なので『小早川忠助正室野庭氏』となります。

武家の妻の姓については、大森洋平『考証要集』による。

二・全裸牢問

町人町の突外れ、道を左へ折れればすぐに武士町につながるあたりにある、どれほどの大身の武家屋敷かと思うような大門と、合戦に備えているかのような土塀。御城下ばかりか、余罪のありそうな盗人や白状に及ばぬ強情な罪人をひとまとめに押し込めている牢屋敷だった。

砂利敷の広い庭をまっすぐに突き当たった小屋に、民江は引き入れられた。

「小早川忠茂が妻、民江。公金横領につき詮議ある故、入牢させるものなり」

大目付配下の与力が、型通りに口上を述べて、縄尻を牢役人に委ねた。

「なお、処罰の一として、名を非人別帳に移した故、かまえて配慮

は無用」
武士が入牢させられるのは余程の場合であり、低い家格であっても揚座敷、家禄が五百石以上は揚屋(あがりや)になる。今の民江は揚座敷にも入れるべからずと、明言したわけだ。
「あーあ、可哀そうに」
女囚と見紛う粗末な形(なり)をした大年増が、聞こえよがしに呟いた。
「元がお侍で、しかも殿様の御金を盗んだとあっちゃあ、御馳走責めが待ってるねえ」
「余計なことを申すな。さっさとお役目を果たせ」
「へいへい」
牢役人にたしなめられて大年増と、これは老婆と呼んで差し支えない女とが、民江の両側に立った。
「では、爾後の御役目を頼み申す」

大目付配下の二人が辞去して、小屋の中には牢役人と二人の女に囲まれた民江。

牢役人が、背後から縄目に手を掛けた。縛るときには相応の手間を掛けていた縄が、スルリと解(ほど)けた。

「衣服をすべて脱げ」

いきなり言われて、民江は耳を疑った。

「危ない物を隠し持っちゃいないか、検めるのさ。独りで脱ぐのが羞ずかしけりゃ、手伝ってやるよ」

大年増が民江の帯に手を掛けた。

「身には寸鉄も帯びておりません」

沙汰を待つ罪人の身であるから、大目付を迎えたときには懐剣はおろか、櫛や簪も着けていなかった。それくらいのこともわからないのか。

パシッと手を払いのけた民江だったが。

「手向かうつもりかッ！」
一括されて、民江の憤りは立ち消える。
「身の程もわきまえず、申し訳ありません。でも、御調べのあいだ、殿方には席を外していただきとう存じます」
「ならぬ。この二人に危害を加えて遁走を謀るやも知れぬ大罪人から目をはなすなど論外じゃ」
これは牢役人の専横ではない。御府内や他国ではいざ知らず、この国では役人が女囚の素裸を目にしても咎められることはないのだった。それどころか……いや、話は順を追って語ろう。
民江は黙し、意を決して帯をほどいた。小袖を脱いで、襦袢姿を晒す。脱いだ小袖は、控えていた老婆がひったくって、どこかへ持ち去った。
「ぜーんぶ脱ぐようにおっしゃっただろ。襦袢も腰巻も足袋もだよ」
「な……？！」

そのようなことをせずとも、隠し物を探るのに不便はない筈。しかし、重ねて逆らうのは無駄と諦めた。

「わかりました」

民江はしゃがんで、裾を気にしながら足袋を脱いだ。それから立ち上がって扱きをほどき、蹴出しを剥ぎ取る。

二度三度と深く息を吐いて、心を落ち着け覚悟を決めて。床の板目を睨みつけながら、震える指で肌襦袢を脱いだ。

胸を隠して佇立して。しかし、「もうよい」とは誰も言わない。

ここまでに肌を晒して見せた男は、腰巻祝いの前までは父親と、以後は良人だけ。赤子時分の佐太郎まで数えても三人。まして、最後の一枚となると……昼日中では、良人にも見せたことがないというのに。

しかし、これが牢屋での決まり事なら、従うしかない。取り乱しては恥になる。

カチカチカチカチ……ひどく耳障りな音が聞こえて。歯を鳴らし

ているのだと気づくまでにひと呼吸あった。
グッと唇を噛み締めて、民江は指をわななかせながら、普段の五倍は時を掛けて、ようやく腰巻を肌身から剥ぎ取った。
民江は床に座らされ、髪を解かれた。ザクザクッと雑に櫛で梳かれる。
「頭髪には、何も隠しておりません」
それが決まり文句なのだろう、大年増が四角四面に牢役人へ告げた。
腰まで垂れかかる乱れ髪は根元を束ねられただけで、結い直す手間は省かれた。
大年増が、絡みつくような口調で。
「そこで四つん這いになっておくれな」
もう、頭はクラクラ。羞恥に気を失いそうになりながら、役人に横向きで床に手と膝を突いた。
大年増が脇に座り込んで、民江の腰に手を伸ばして。

「きゃああっ！　何をなさいます？！」
いきなり股間をまさぐられて、民江は相手を突き飛ばして立ち上がった。
「逆らうかッ！」
牢役人が駆け寄って、民江を引き倒した。
「ええい、面倒な。どうせ、すぐに吟味じゃから、こうしてくれるわ」
ほどいたばかりの捕縄ではなく、もっと太い縄を壁掛けから老婆に持って来させて、民江を縛りに掛かる。
「もう、何をされても抗いませぬ。縛らないでください」
抵抗しないのなら、縛られていようといまいと同じはずだが、理屈ではない。身体の自由を奪われることには、どうしてもおぞましさを感じてしまう。
「言うたな。何をされても、まことに抗わぬのだな」

牢役人の声がねちっこくなったのに、民江は気づかない。
「はい」
「ならば、おとなしく縛られろ」
あっ……と、民江は臍を噛んだ。揚げ足取りもいいところだが、言い返せない。
肩がはずれるのではないかと思うほど、腕をねじ上げられた。拳を斜めに突き上げるような形にされて、手首を十文字に縛られた。縄尻が乳房の下を巻いて、胸の谷間を通って肩越しに後ろへまわされ、さらに腕を吊り上げられた。
「俯せになって尻を突き上げろ」
四つん這いよりも数倍羞ずかしい姿勢を命じられて、身体が動かない。
「まだ逆らうかッ！」
役人が手を水平に引いた。
「ひ……」

咄嗟に、民江は目を固く閉じて顔を背けた。
バッチイン！
「きゃああっ！」
胸に凄まじい痛みが奔った。
三人の子に吸わせても、まだまだ豊満で張りのある乳房が横にひしゃげて、プルンと跳ねる。
乳房を殴られたはずみで床に転がった民江の身体を役人が抱き起して、命じた姿勢を無理強いに取らせた。
「痛い目に遭いたくなければ、おとなしくしておれ」
股間をまさぐられ、淫穴に指を挿れられても、民江はもう逆らわなかった。それが決まり事なのか、逆らった意趣返しなのか、あわあわと肉壺を掻きまわされ、淫豆をくじられて――場違いな気分に追い上げられて、民江はおのれを愧じた。綾乃を産んだ後に女の絶頂を知り、三十路を過ぎてからも十日と空けずに良人に啼かされてきた身体である。妖しい指遣いには、どうしても妖しい気分を掻き

立てられてしまう。
しかし、そんな辱悦も。
「ひゃああっ？！」
ツプウッと、尻穴に何かを差し込まれて掻き消えた。
「何をなさいます！」
「身体の裡にも、隠し物はございません」
民江の驚愕に肩透かしを食わせて、大年増が牢役人へ告げる。
「では、異例のことではあるが、ただちに吟味に取り掛かる。民江、立ちませい」
良人以外の、男でも女でも、面と向かって呼び捨てにされるのは、これは生まれて初めてのことだった。が、今は屈辱を噛み締めているどころではない。
老婆が民江に腰巻を巻いた。が、襦袢を着せかけてくれようともしない。

「あの……わたくしの着物は、返していただけないのでしょうか」
返されても、縛られたままでは着られないのだが、腰巻一枚で引っ立てられるなど……民江の憤りと羞恥と不安とは、しかし娘の姿が頭に浮かぶと、先細りとなった。そこへ追い討ち。
「小早川の分限は、ことごとく闕所（没収）じゃ。おまえの着物など、三万両の足しにもなるまいがな」
「三千三百両です」
屋敷から牢までまっすぐに引き立てられて来たというのに、もう噂が尾鰭を生やして先回りしている。しかし、台所勘定に頭が行く女の性（さが）が、ここでは民江を陥れた。
牢役人が、ニヤリと嗤った。
「ほう。それを認めるのだな。これは、吟味掛に伝えておかねばな」
「認めたのではありません。そのように疑われていると申し上げたのです。良人が公金を盗んだなど、濡れ衣に決まっています」

行きがかり上、そう言ってしまったが。三千三百両が失せていて、小早川は逐電してしまった。濡れ衣とは、民江も思っていない。ただ、なんらかの焉むに止まれぬ事情があったに決まっていると、これだけは良人を信じている。

「本来なれば、その布も取り上げるところぞ。温情がわからぬか」女子を素裸に剥いておきながら、温情もあったものではない。しかし。当然の憤りが湧いてくる都度に、綾乃の無残な姿が瞼にちらついて、心が折れるのだった。

「牢内では着の身着のままが常だが、格段の訳があるときは牢名主から御着物拝借願が出される。それまでは、裸でおれ」

折れた心をさらにへし折るような言葉が浴びせられた。

格段の訳というのは――蚤虱が夥しく天日干しでどうにもならぬようなときとか、蔓を持たずに入牢して身内の差し入れもない女が着衣を売らされたときとか、娼売に励んでいる夜鷹が（取締役人の趣向によっては）そのまま捕縛されたときとかである。

「どうせ、おまえは牢問に掛けられる。そのときは、骨身にこたえるよう肌を曝させるのが決まりだ」

手間が省けるというものだ――と、牢役人が薄く嗤った。

娘と同じ姿で（高札を背中に突き通されていないだけ、まだしもだったが）小屋の外へ裏口から引き出され、長屋一棟を半分に切り分けて重ねたほどの建物に移された。

中は長屋と違って、大きく田の字形に区切られているだけで、その仕切壁も半分ほどで途切れている。そして、民江の目にも、人を責めるための道具立てとしか思えない、様々な調度が壁に沿って並べられていた。

大きな滑車から垂れた太い鎖、畳の四半分ほども有りそうな分厚い何枚もの石の板、台の上に横たえられた梯子、脚立で高く持ち上げられた長さ四尺（約百二十センチ※）巾一尺半ほどの鋭く尖った三角の材木、水を張った大きな桶。壁には、六尺棒やら短い竹竿など、大小長短の鎖や縄も掛けられている。間取りを不便にしている

としか思えぬ中途半端な柱も、人を縛りつける為なのかもしれない。

しかし、民江がそれ以上に驚いたのは。間仕切りを越えて奥の部屋へ引き入れられて。そこに立っている男の姿を目にしたときだった。

牢役人は上の者も下の者も羽織袴は着けていないが、その男だけは正装だった。顔にも、民江は見覚えがあった。

四十絡みで細身の優男のようでいて、肉が薄い分だけ人情味に欠けたような顔つき。

「斯波様……？！」

勘定方奉行、斯波和成だった。良人の上役。そして――十九年の昔に父の野庭恒明に縁談が持ち込まれたが、酷薄な顔つきに民江は好意を持てず、家格の違いを口実に断わってもらった相手。斯波家からの一方的な申し入れだったから、断わっても波風立たぬ筈だったし、事実、小早川との婚儀に、どこからも異論は出なかった。斯

波が親の跡目を継いで奉行に昇進してからも、小早川が嫌がらせを受けたりはしなかった。

上役とはいえ御役目を越えての付き合いまではなかったから、新年の挨拶に夫婦で出向いたこともない。道で行き会えば、ほんの短く遜った挨拶を述べるばかり。そんな男が、どうして役目違いの――と、そこまで考えて、そうではないのだと思い至った。

御蔵番頭の不祥事は、そのまま勘定方奉行の失態。それだけでも、直々に問い質したい事柄もあるだろう。しかも、事は公金。大商人の土蔵から千両箱が盗まれたのとは訳が違う。民江が勘定方にまつわる何某（なにがし）かの秘密を夫から聞いていて、それが下っ端の牢役人から外へ漏れでもしたら大変なことになりかねない――と、取越し苦労もするだろう。

斯波が民江の吟味に立ち会う理由は、じゅうぶんにあるのだった。

「おまえの亭主は、どこまで拙者に煮え湯を呑ませてくれるのだ」

苦りきった、しかし底意地の悪そうな口ぶりで、斯波は十九年前の不縁をまだ根に持っているのだと、民江は直感した。しかし、そんな些細なことに心を煩わせてはいられない。

「このたびは、小早川（※）が大変な事をしでかしてしまい、お詫びの申し上げようもございません」

素裸も縄目も忘れて、民江は心の底から謝った。今でも何かの間違いではないかと思っていること、まことに事実であるにしても、家族が悪銭で潤ったためしなどないし、まして、吟味で白状すべき何事もないこと――等々は、この場で口にすべきではなかった。

「ふん。おまえの詫びなど一両にもならぬわ。申し訳なく思っているなら、彼奴の逃げた先の心当たりなり、盗んだ金の隠し場所なり、さっさと白状してもらいたいものだな」

やはり――長年連れ添った妻が何も知らないとは、誰も思うまい。

「知らないのです。小早川が、このような悪事を働いていたなど、わたくしにも寝耳に水なのです」

「盗みの現場を見られても、あれこれ言い訳してシラを切り通そうとする不届き者も、珍しくはない」
民江の背後から、新たな声があった。
「其の方の吟味を仰せつかった八幡じゃ。乳母日傘で育った身には、わしの吟味はきついぞ。知っておる限りを白状するのが、双方の為というものだぞ」
民江の前に立った八幡は、良人より額の分ほど背が高い。ということは、身の丈五尺七寸くらいか。凶悪な賊もねじ伏せてしまいそうな、がっしりした体躯と、輪郭といい釣り上がった眉の太さといい、男物の下駄そっくりの風貌だった。
「知らないものは、白状のしようもございません」
眉に釣り合う大きな口が割れて、分厚い舌がペロリと上唇を舐めた。
「では、牢問もやむを得んな。武家の出だろうと女子(おなご)だろうと、容

赦はせんぞ――そこに座れ」
手にしていた竹の棒で、八幡が床に敷かれた筵を指した。
民江は裾が乱れぬよう、ゆっくりと膝を屈したが、それでも膝丈の腰巻では、太腿の半ばまでが露わになった。
八幡が民江の後ろに立ち、筒袖を尻絡げして六尺褌を覗かせた下人が二人、三尺ほど離れて左右に控えた。
「重ねて問うぞ。小早川の逃げた先、いや、方角だけでも良い。あるいは、金の隠し場所について、いささかでも思い当たる事あれば、すみやかに申し出でよ」
言いながら、竹の棒でピタピタと肩を叩く。
「あれは、竹刀なんかより、よっぽど痛いですぜ」
下人の一人が、床几に座っている斯波を振り返って――民江にも聞こえる声で説明した。
「箒尻といいましてね、太さ一寸の竹を二尺に切って二つに割って、麻紐で巻き固めた物です。百敲きにも使います」

「二尺？　もっと長く見えるぞ」
「いえ、鯨尺ですんで」
鯨尺の二尺は曲尺なら二尺五寸（約七十六センチ）。皮を巻いた握りを含めれば、たしかにそれくらいの長さだった。
民江にとっては、竹刀だろうが六尺棒だろうが、素肌を打ち敲かれることそのものが恐怖であり恥辱だった。
「知らぬと申し上げ……きひいっ！」
バチインと、凄まじい音が広い吟味部屋に響いた。
敲き責めに掛けるときは、不必要に骨まで痛めず、かつ、囚人に痛みを存分に与える為に、肩の筋肉が盛り上がるように縛ってある。そこを、八幡は片手とはいえ手加減なしに敲いたのだった。
バチイン！
バチイン！
大事が漏れぬようにと斯波が立ち会うくらいだから、他の囚人の吟味は行なわれていない。肉を打つ音と、かすかな呻き声とが、間

断なく繰り返される。
民江は気丈に悲鳴をこらえているが、苦し紛れに頭を振り立てるので、背中一面に髪が広がって、肌に汗で貼りつく。
八幡は左右の肩を交互に敲いている。微妙に場所も違えて――きっちり五十発で手を止めた。
民江の両肩は真っ赤に腫れて、どす黒い打ち身痣も浮いている。最後まで正座の姿勢を崩さず、両側に控えている下人の手を煩わせなかったのは、女子としては珍しい。武家の妻の意地ではあったが、ある種の趣向の持ち主の目には責め甲斐のある女囚に見えたことだろう。
「しぶとい女子だ。斯波殿。念を押すが、なんとしてでも白状させねばならぬのですな」
「その通り。殺さぬ限りは、御牢法度など気にせずともよろしい。責めは拙者が負う」
「なれば――一日で二通りの牢問に掛けるは法度なれど、強行致す」

民江からは顔が見えぬのをよいことに、八幡は斯波に向かって意味ありげにうなずいた。

二人が話を交わしているあいだも、民江は激しい肩の痛みに喘いでいる。そして、痛み以上に。罪人として拷問に掛けられているという事実に打ちのめされていた。

厳密には、敲き責めは拷問ではなく牢問であるのだが、そんな区別は知る由もない。まして、この痛みは序の口でしかないなどと、想像出来ようはずもないのだった。

民江はいったん縄をとかれて縛り直された。同じ後ろ手ではあったが、先ほどまでのように高くはねじ上げられなかった。しかし、胡坐を組んで座るように命じられた。

「そのような羞ずかしい真似はできません。こればかりはお赦しください」

囚われて初めて、民江は拒絶ではなく嘆願した。が、聞き入れら

れるはずもない。
「やれい」
八幡の指図で、二人の下人が民江の両脚を尻の下から引き出して、力づくで胡坐にする。
「いやあっ……おやめください」
胡坐に組んだ足が引き寄せられて、脛と脛とが縛り合わされた。腰巻は捲れあがって、太腿どころか股間の黒い翳りまで露わになってしまった。
「こ、このような……せめて、裾を合わせてくださいませ」
開脚していては裾廻りが足りないが、布の端で股間を隠すくらいは出来る。しかし、八幡はそれを命じない。
下人の二人が民江の背後にまわって、両肩を押した。上体がグウッと深く折り曲げられる。
「くうう……痛い。もう無理です」
下人が体重を乗せて、さらにグイグイと上体を押し込む。ついに、

肩と膝とがくっついてしまった。縄が両腋を通って、肩と脛とを縛り合わせた。
「くううう……うう……」
民江は細く呻くだけで、もはや苦痛を訴えない。いや、言葉を発するのも苦しいのだ。
「白状するまで、このまま捨て置くぞ」
八幡が脅しにかかる。
「今はまだ背中と腰が痛いだけであろうが、じきに鬱血で全身に凄まじい痛みが巡る。二時（ふたとき）（※）もすると息絶えてしまうのだぞ。それまで我慢比べをしてみるか」
「……ほんとうに、何も知らないのです」
苦しい息の下から答えて。しかし、民江はそれがどういう結果を招くか覚悟の上で、言葉を足した。
「もし……何某（なにがし）かを知っていたとしても、どうして……良人を裏切

ることが出来ましょう。このまま……責め殺してくださいませ」
どのような仕打ちにも耐え忍べと、子供達には言った。けれど、殺されるのであれば、みずからの言葉と矛盾はしない。あるいは、綾乃もこの道を選ぶのではなかろうか。

「八幡氏（うじ）」

床几の上から、斯波が声を掛けた。

「拙者とこの者とは、浅からぬ因縁がある。余人を交えず説得を試みようと存ずる。場を外していただけぬか」

八幡は顎に手を当てて、しばし考え込む振りをした。実は、小早川追捕の路銀から斯波が摘まんだ金を握らされて、とっくに話がついている。

「牢役人が同席せぬなど、極めて異例ではありますが、事が事だけに、是非に及びませぬな。用が終わったら声を掛けてくだされ」

八幡が二人の下人を従えて、吟味所から出て行った。

「縁談が壊れたのは、おまえの我儘からだったと聞き及んでいるぞ。玉の輿を袖にして、録でもない男と野合して、挙句はこの様か」

ええっ……と、民江は驚いた。根に持っているどころか、十九年間ずっと逆恨みをされていたのかと、男の身勝手さ執念深さに怖気を振るった。

「そのように俯せでは苦しかろう」

民江を抱き起して、部屋の真ん中に突き出ている柱に背中をもたせかけた。

そうされると――たくれた腰巻は役に立たず、秘所が男の目に曝される。

「やめてください。このような無体、いくらわたくしが罪人とはいえ、非道が過ぎます」

フフンと、斯波が嘲嗤った。

「無体というのはな、こうするのだ」
背後に動いて、柱越しに民江の裸身を抱き締めた。丸く張った乳房を両手につかんで、モギュモギュグニグニと――揉むのではなく、こねくる。
「やめ……やめて……人を呼びます！」
もちろん、良人からもこのように乳房を弄ばれた、いや甚振られたことなどない。生まれて初めて身体に抉り込まれる激痛に息も絶え絶えになりながら、民江は訴えた。
「我が呼ぶまで、誰も来ぬわ。こうされるのは厭なのか」
「当たり前です！」
小さく叫ぶと。意想外にも斯波はあっさりと乳房から手をはなした。
「え……？　あれええっ！」
起こされた上体を再び床に倒され、しかし、俯せではなく仰向けに転がされた。手首が背中に押しつぶされて痛い――のは、二の次。

これでは、斯波がどこにいても、秘所を見せつけてしまう。
「もっと無体をしてやるぞ。新鉢を割れなんだのは無念だが、そのぶん熟れてはおるだろうて」
あわただしく、斯波が羽織をかなぐり捨て袴を脱ぎ着物の裾を端折る。
なにをするつもりかと見上げる民江の目に、醜く盛り上がった越中褌が映じた。
「ま、まさか……」
「まさか？　最後まで言ってみろ。小早川に嬲られてすっかり熟れた女淫（ほと）に魔羅を突き立てるのですか、と」
「舌を噛みます！」
民江は思いきり舌を突き出して、歯で咥えた。当然のことだった。
良人以外の男に操を穢されて、生きていられよう筈もない。
良人の行方と金の隠し場所を知っているのではないかと疑われて

いるのなら、むざと自害はさせまい。狼藉を諦めてくれるのではないかという、淡い望みもあった。

しかし、斯波は平然と褌を取り払った。

良人のそれよりも、ずっと急峻に聳え勃つ逸物を目の当たりにして、民江は慌てて目をそらした。

「死にたければ、勝手に死ね」

「……！！」

まさかの言葉を浴びせられた。

「しかし、彼奴の追及はせねばならん。琴乃を召し取って牢問に、いや、ずっと厳しい拷問に掛けることになるぞ」

「あの子は、何も知りません！」

叫んだ民江を、斯波が冷たく見下ろす。

「ほう。おまえは、知っておるのだな」

「わたくしも知りません。佐太郎も綾乃も、一切係わりの無いこと

です」
身体を真っ二つに折られている苦しみも、母が子を庇う気持ちの前には消し飛んでいる。
「どうかな。本人を責めてみればわかることだ。ふむ。彼奴の手垢のついた年増よりも、まだ熟れておらぬ木通（あけび）を食してみるのも、一興かも知らんな」
木通がどのような形をしているかくらい、御城下からほとんど出たことのない民江でも知っている。拷問に掛けるだけでなく、民江と同じように手籠めにすると、斯波は言っているのだ。
自害して操を守るという最後の手段を、民江は封じられた。
「そのような出鱈目、御上が許す筈がありません」
ワアハッハッハ――斯波が大笑した。作った笑いだと、民江にもわかる。
「その御上は、ここにおるわ。我は、御家老より、如何なる手立て

を講じても小早川を討ち果たし、公金の一部なりとも取り返せと、この件については総差配を命じられておる。もちろん、殿も御承知のことだ」

絶望で目の前が昏くなる。それでも、民江は気丈に斯波を睨みつけた。

「それを良いことに、昔の私怨を晴らそうというのですか」

「余禄というものじゃ」

生殺与奪の権を握っているという増上慢が、斯波の顔に浮かんでいる。

「一切を白状するなら、八幡を呼んでやっても良いぞ」

民江は、ついに目を閉じた。

「お好きなようになさいませ。自害は諦めましたが、心はもはや死にました。屍をどのように扱われましょうとも、民江は痛くも痒くもありませぬ！」

それが、最後の儚い抵抗だった。

「そうか。その高言、嘘か真か試してくれよう」
斯波は真上から民江にのしかかった。手は床に突いたが、いっそうの苦痛を与えようと、肘を曲げて、肩に縛りつけられている民江の脹脛に押しつける。
「ぐううう……」
民江の固く食い縛った歯の隙間から、苦悶の呻きが漏れる。
斯波は右手を浮かし、ペッと掌に唾を吐いて、それを魔羅に塗りつけた。その手で淫裂をまさぐり、押し開き、魔羅を突き立てた。ギチギチ、ギチギチ……乾ききった淫穴に剛直がゆっくりめり込んでいく。
「……」
十八年の昔に、良人に初穴を穿たれたときよりも鋭い痛みを、民江は耐えている。その目からは、滂沱の涙があふれている。それほどに痛い――のではなかった。

―良人と結ばれたときは、痛みの中に悦びがあった。しかし今は―恥辱、屈辱、瞋恚、憤怒、侮蔑、怨嗟、悦びとは真反対の感情が渦巻いている。そして、何よりも。我が子を護るためとはいえ、心ならずも良人を裏切っているという慙愧の念。

民江にとってわずかな救いは、どれほど斯波に犯されようと、子を孕む懸念だけはないという、その一点だった。

琴乃のときは、母子ともに危うい局面まであって、それが因で二度と子を設けること能わぬでしょうと、産婆に告げられた。事実、あと一人くらいは男子をと、良人も願ったのだが、ついに願いは叶わなかった。

その悲しみが、今は唯一の救いなのだった。

斯波が、腰をヘコヘコと動かし始めた。が、すぐに立ち上がった。

「くそ。どうにも具合が悪い」

淫穴と魔羅とがうまく嵌り合わないのだった。すぐに先がつっかえる。肘を伸ばして腕を突っ張ってみても、まだ不十分だった。

「だいぶにてこずっておられる様子ですな」
いつの間にか八幡が後ろに立っていた。
「あ、これは……」
慌てて前を隠そうとする斯波。
「いや、これは、つまり……」
「お平らに」
八幡が手で制す。
「それも、女に口を割らせる非情の手段とお見受けします」
斯波がホッと息を吐いた。金で殺したとはいえ、吟味の場で民江を犯すとまで断わっていたわけではない。
「しかし、御牢には御牢の作法があります。おい、イチ」
斯波に箒尻の講釈を垂れていた下人が、ヒョコッと姿を表わした。
「斯波殿のお手伝いをしてさしあげろ」
では、これで――と、早々に八幡は立ち去った。
「ちょいと御免くださいましよ」

イチは民江に歩み寄ると、元の海老責めの姿に裏返した。
「大きな声じゃいえませんが、御役人だって男でさ。好い女を見れば、おっ勃っちまっても仕方ありやせん。けど、御牢内で女囚を姦ったとあっちゃ、下手すりゃ下手しますからね」
しゃべりながら。肩と脛とを縛り合わせている縄を緩めて上体を起こさせ、あらためて足首に縄を巻いて首につないだ。その縄を引き絞って、上体を半分ばかり倒させる。
「この形、座禅を組んでいるように見えますでしょ」
「……」
「それを、これ、このように……」
片手で民江の肩をつかみ、もう一方の手は尻を下から掬って、前へ押し倒す。民江の身体は、両膝と顔の三点で支えられる形になった。その結果、尻が高く突き上げられて、後ろからもぱっくり割れた秘所が覗き込める。
「こうしておいて、旦那は腰を突き出すだけで、なんて言いますか

ね……たまたまそこにあったなにかに魔羅が嵌ってしまう。けっして女囚を抱いたわけじゃない。ていう寸法でさあ」

斯波は、呆れた顔で下人と民江の尻を見比べている。

「そのような詭弁が通用するはずもなかろう」

「ところがどっこい、てやつでして。どのみち、旦那は御家老様の御墨付を頂戴してるじゃないですか。どうぞ、御存分に座禅転がしをお愉しみくださいな」

下人も出て行った。

斯波は、あらためて民江の尻に向かい合った。桃尻とはいうが、じゅうぶんに熟して、今のうちに食べておかねば味が落ちる。そんな風情だった。いったんは垂れていた魔羅が、グウウッと剛直に変貌した。

「なるほど……」

斯波は膝を追って高さを合わせると、グイと腰を突き出した。

ズブウッと、なにかが魔羅に嵌り込んだ。

「く……」
民江が、屈辱に呻く。
「なるほど、これは具合が良い」
ズンズン、ズンズンと腰を突き挿れ、斯波がひとりうなずく。
「しかも、こうすれば……」
上体を民江の背中に預けて、両手で乳房をつかんだ。
「こちらも愉しめるな」
最前よりもいっそう乱暴に乳房をこねくりまわした。今度は太腿が邪魔にならないので、存分に甚振れる。
「くっ……くううう……う」
乳房を突き抜ける痛みに、歯を食い縛って悲鳴をこらえる民江。
「ほほう。屍が声を出すのか」
斯波にからかわれて、呻き声さえも呑み込んだ。
「十九年も待たされた初夜じゃが……さすがに緩いな」
とは、斯波の強がりだった。たしかに、隧道はじゅうぶんに掘削

されているが、それだけ柔らかくこなれている。女がその気になれば、若妻とはまた異なる味わいがあろう――女がその気になれば、である。

しかし。貫かれ抽挿を繰り返されても、民江の隧道は乾上がっている。斯波にとっては、ギチギチゴシゴシと、鮫肌に魔羅を擦りつけているようなものだった。

それはそれで、刺激は強い。加えて――女を縛って犯すという、日常では絶対に許されざる行為。しかも、有明行燈の明かりに浮かぶおぼろな裸身ではなく、陽の光に満ちた部屋で白い肌を目の当たりにもして。

「引導を渡してくれるわ！」

感極まった声とともに、欲望を民江の中に解き放ったのだった。

「用はお済みですか」

すぐにイチがはいって来た。外で聞き耳を立てていたのは明白だったが、斯波は咎めない。ばかりか、気さくに声を掛けた。

「先人の知恵というものかな」
「へへ。御牢に秘伝の技は、他にも色々とありやすがね」
懐紙を拝借と、両手を出して。押し頂いた懐紙で民江の跡始末をした。それから首縄はほどいて、斯波と二人がかりで、民江をまた真っ二つに折り曲げて、元の形に縛り直した。
「おまえ、イチとかいったな」
「へい。相棒のほうはクロと申しますが、やつは力ばかりの薄ノロでして」
斯波は財布を手に持って、ちょっと思案してから小判を取り出した。悪事（とは、民江以外の誰も思っていないのだが）の片棒を担がせたにしても、張り込み過ぎている。
「ありがたく頂戴しやす。これからも、秘伝の技をお披露目させていただきやすぜ」
「うむ。頼むぞ」
そういうことなのだった。

「八幡様。斯波様の御用はお済みです」
イチが大声を張り上げた。これで、民江を吟味するにあたっての、イチの立場が明確になった。
打てば響くといった態で、八幡が吟味部屋に入って来た。こちらも聞き耳を立てていた口か。
「首尾は如何ですかな」
「しぶといわ。優しく言い聞かせても、だんまりの一手じゃ」
言葉とは裏腹に、二人はうなずき交わす。
「では、厳しく言い聞かせては如何ですかな」
「とは？」
「知れたこと」
八幡は壁から箒尻を手に取った。
「敲き責めも加えるのです。といって、肩をこれ以上打っては、医師の手を煩わせます」
ツンツンと、尻をつつく。

「背中は横に敲かねばなりません。背骨に当たると殺しかねませんので」
斯波に箒尻を差し出す。
「なるほど。一度は嫁に迎えようとした女子。余人に敲かせるよりは、手ずから責め問うてやるほうが、情けというものじゃな」
片手で箒尻を大きく振り上げて、力任せに尻へ叩きつけた。
バッシイン！
「くっ……」
たちまちに、太く赤い痣が白い肌に浮かび上がった。
バッシイン！
バッシイン！
尻が真っ赤に染まっていく。民江は悲鳴はおろか呻き声すら漏らさない。哭き叫べば、それだけ斯波を悦ばせる――と、女の本能と意地が告げていた。
尻に十発ばかり、背中と脇腹も同じくらい敲いて、斯波は箒尻を

八幡に返した。
「今日のことにはなりそうにないですな。拙者、午から用事がある。後はお任せしますぞ」
用事があるというのはほんとうかもしれないが。精を放ってしまえば虚脱に襲われて。民江憎しの思いで敲いたものの、やはり今ひとつ興が乗らなかったのかもしれない。もちろん。裏の絡繰まで八幡には教えていないが――がっつく必要のないことは、斯波にだけはわかっている。
白状しようにも何も知らず、娘を人質に取られて自害も封じられた生贄は、斯波が飽きるまで、あるいは苛酷な拷問に息絶えるまで、責め嬲られ犯されるのだった。
斯波が出て行っても民江への牢問、いや嬲り責めは終わったわけではない。
「そういつまでも吟味所を独り占めにはできんな。イチ、竹轡を噛ませておけ」

「へ……？」
「わからぬか。どんな御馳走も食えなくしてやるのだ。糞臭い息を吐く女には、斯波殿も興醒めだろうて」
「あ、なるほど」
もちろん。民江には二人の遣り取りの意味はわからない。
下人が壁の棚から竹の棒を取ってきた。棒ではなかった。短く切った竹の節を抜いて、縄が通してある。
「口を開けてくんな」
民江が口を開けると、歯を割って竹を噛まされた。頭の後ろで縄が結ばれて、さらに何かが巻きつけられた。封印であろう。
これも意図的な辱めのひとつなのかと、民江は疑った。自害など出来ぬと、この役人も知っているはず。女犯さえも吟味の非常手段などと嘯いているのだから、何を喚かれようと気にせぬはず。もちろん民江には、我から恥を公言するつもりなど毛頭もないが。
民江は海老責めに縛られたまま、部屋の奥へ運ばれた。こうする

だけで、仕切り壁に阻まれて、ほかの吟味部屋からは民江の姿が見えない。

「あと一時ほどは、命に別状あるまい。このまま強情を張り通せるか、よくよく考えておれ。言っておくが、今日の責めなぞ、小手調べのようなものだぞ」

八幡とイチが姿を消して。民江は床に放り出されたまま、身体を真っ二つにへし折られている苦痛に脂汗を全身に滲ませながら呻吟している。

「く……ぐうう、う……」

先ほどのように気を張っていなければ、おのずと呻き声を漏らしてしまうのだ。

戸板の開く軋みが聞こえて。数人の気配が立ったが、民江からは姿が見えない。

「茂平、先日も申した通り、動かぬ証拠があるのだぞ。素直に罪を認めよ」

「俺じゃねえ。あんときゃ嬶と家に居たって、申し上げてるじゃありませんか」
「それは夫婦示し合わせての嘘だと、ミツは認めておるぞ」
「それこそ、嘘だ。あいつは、そんな出まかせをいうような奴じゃない。ほんとうに、俺は殺しちゃいねえんだ」
それきり言葉が途絶えて。ゴトゴトと重たいものを動かす物音があって。
「痛い。なんだって、こんなとこに座らせるんですか。え……やめてくれ。いや、やめてください。そんなの乗せられたら、脛が折れちまうよ。いやだ、やめろ……ギャアアッ！」
悲鳴が途絶えて、荒い息遣いだけが聞こえてくる。
「白状せねば、二枚目を積むぞ」
どのような責めが行なわれているのか、民江には想像もつかない。
「ぎゃあああっ……痛い痛い！」
大の男が泣き叫ぶような凄まじい拷問としかわからない。

それから小半時ほどが過ぎて。三枚目とかになると、悲鳴はいっそう大きくなって、すすり泣きが続く。

しばらくすると泣き声は弱々しくなり、四枚目では、悲鳴が聞こえてこなかった。

「どうじゃ。この上もシラを切るなら五枚目を積むぞ。ほんとうに脛が砕けるぞ」

それが、最後のひと押しになった。

「御調べの通りです……」

男の声に諦めが聞き取れた。

「留吉を殺ったのは俺です……でも、商売道具の鑿なんざ使ってません。台所から持ち出した出刃包丁です。これだけは、大工の名誉に掛けて、申し上げます」

自身も拷問の苦しさに喘ぎながら。民江は吟味役人の狡知を察した。出刃包丁と鑿の傷を見間違えるはずもない。カマを掛けて、痛みを逃れたいだけの嘘を見分けるのだろう。

しかし、わたくしには――掛けられるカマもないと、民江は絶望する。白状すべき事柄が一切無いのだから。脛が砕けるまで今の責めを加えられて、それでも真実を貫けば、八幡様は信じてくださるかも知れぬ。しかし斯波は――たとえ信じても、さらに拷問を続けるのではなかろうか。凌辱をも交えて。

民江は、拷問に屈した男を羨ましくさえ思うのだった。

※単位換算について

一間は正確には一八一・八一センチ、一尺（曲尺）は三〇・三センチですが、有効数字を考慮して表記します。四尺＝百二十一センチとは書きません。

航空物で『高度三万フィート（九一四四メートル）』などという記述を見かけると、イライラします。右の表記では九一四三・五メートル以上九一四四・五メートル未満の意味になりますが、実際には約九千メートルです。航空管制は千フィート刻みです

から、そういった場合は九千百メートルと表記すべきです。

※夫を姓で呼ぶ

現代でも夫を姓で呼ぶのは、公式の場では当然の礼儀です。覚えておきましょう。

上司のヤマダ部長を来客や他社との打ち合わせでは「ヤマダが」とか「部長のヤマダが」と言うのと同じです。

斯く謂う筆者も、父親の葬儀のときに母が「ホリカドが」と言うのを聞いて、そうなのかと知ったのですが。

これは、戸籍制度以前には、妻が良人の性を名乗らなかった（第一章参照）ことも関連しているのでしょう。

※時（トキ）と刻（コク）

この作品においては時間時刻の単位として『時』を使っています。

『刻』には、昼と夜をそれぞれを六等分した日常的な時間単位の他に、一日を百等分した単位もあるからです。こちらでは、一刻は約二時間ではなく、正確に十四分二十四秒です。当時の暦学者（イコール天文学者）が使っていましたが、人口に膾炙もしていました。

『一刻を争う』という表現がそれです。いくら昔はノンビリしていたとはいえ、三十分や一時間くらいはどうでもいい筈がありません。